

替え歌が記憶に及ぼす影響について

池川 絵理

物事を記憶するために、様々な方略が取られている。なじみのある歌を用いた記憶方略は、視覚提示のみあるいは、読み上げた音声提示を利用して記憶するよりも記憶成績が良いことが示唆されているものの、その効果を実証した研究は未だ少ない。そこで本研究では、記憶方略の一つとして、なじみのある歌を用いた単語の記憶(替え歌記憶法)の有用性について検討することを目的とした。実験1では読み上げ条件、リズム条件、歌条件に分けて、単語の再生数を比較した。実験2では、音声要因(2水準: 読み上げ、歌)と、提示のモダリティ要因(2水準: 視覚+聴覚、聴覚)の4条件で再生数を比較した。また、再生する際の提示順の効果や、主観指標についても比較検討した。

実験1では、上記3条件に分けて、日本語となじみのない外国語(ハンガリー語)の対を5回聴取して各回の直後に再生するという課題を行った。その後、計算(妨害)課題を行い、遅延再生を行った。その結果、条件における再生数に差はみられなかったが、聴取回数が増えるごとに、再生数が増加した。計算課題の直前である5回目聴取後と計算課題後では、再生数に差はみられなかった。また、再生順序の影響についても、条件間で差は見られなかった。主観指標において、歌条件、リズム条件は読み上げ条件よりも覚えやすさの得点が高かった。実験1においては、日本語と外国語が交互に提示されるという対連合学習の形を設けたが、替え歌の効果を調べる実験には適さない手法であると考えられたため、実験2では無意味語を連続提示する手法に変更した。

実験2では、上記4条件に分けて、無意味語を10回連続聴取し、その直後に再生、その後計算(妨害)課題を行い、遅延再生を行った。そして一週間後にも再生を行った。その結果、音声要因と、提示のモダリティ要因のそれぞれで再生数には差がみられず、直後から遅延、一週間後と時期がたつにつれて再生数が減少することが確認された。また、提示した刺激を前・中・後に分けて、再生する際の提示順の効果について検討した結果、遅延再生で読み上げ条件が、提示順の前・後よりも中で少なかった。つまり、歌条件では、提示順にかかわらず一定に想起できているといえる。主観指標においては、覚えやすさ、思い出しやすさの得点が、読み上げ条件より歌条件で高かった。また、楽しさの得点が1日目、一週間後共に、読み上げ条件より歌条件で高かった。

実験1と2の結果から、替え歌を用いて記憶を行うことが、記憶を促進するとはいえないことが示唆された。しかし、提示順の効果がみられ、読み上げで記憶すると提示の中間部分の再生数が少なくなったが、歌で記憶をすると一定に想起することが示された。視覚提示の有無による成績の差がみられなかったことから、記憶には視覚の影響はないことが示唆された。また、替え歌で記憶すると、読み上げで記憶するよりも「覚えやすさ」や「楽しさ」の得点が高いことから、教育場面でとりいれれば、意欲や動機づけの観点から効果があると考えられる。替え歌を用いて記憶する際、歌が手がかりとなって想起されると考えられるため、歌の構成要素を操作すれば、記憶を促進する効果が確認されるかもしれない。(安全行動学)